

大地を潤す水の恵みと水害

南アルプス市南部の遺跡群



二本柳遺跡(十日市場)：平安時代から鎌倉時代(10世紀～13世紀)および室町時代(14世紀～15世紀)にかけての水田の跡を中心に、水路や祭祀遺物などが数多く見つかった。このほか、戦国時代の寺の跡や弥生時代の遺物も見つかっている。



遺跡を覆う砂礫層：二本柳遺跡などでは、弥生時代から現代まで、水害により4m近い土砂が堆積しており、これに立ち向かった先人の苦勞を知ることができる。



向河原遺跡(江原)：現代の水田の下から、山梨県に稲作の技術が伝わって間もない、弥生時代中期の水田の跡が発見された。



大師東丹保遺跡(大師)：漆椀や網代垣(県指定文化財)など様々な遺物が見つかった(鎌倉時代)。



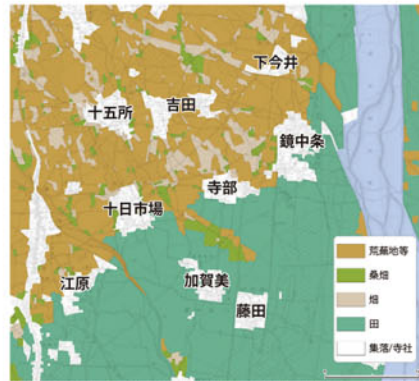
宮沢中村遺跡(宮沢)：度重なる水害のため、明治時代に移村を余儀なくされた旧戸田集落の下に、厚い砂礫層を挟んで鎌倉時代と見られる水田跡や網代を用いた護岸施設などが発見された。



油田遺跡(田島)：弥生時代後期の竖杵(たてぎね)が発見された。脱穀に用いたとされ、現在見つかった中では山梨県最古の農具。



溝呂木道上第5遺跡(十日市場)：狩猟採集が主だった縄文時代と、稲作の伝わった弥生時代をつなぐ時代の土器が見つかった。



明治21年の土地利用状況：御勅使川扇状地扇端部の鏡中条、寺部、十日市場、江原あたりの湧水線を境に、その北側が荒地か畑地、その南が水田となっていることがわかる。

山梨県立博物館企画展

水の国やまなし—信玄堤と甲斐の人々—

現在開催中の山梨県立博物館の企画展です。信玄堤をはじめとする治水・利水の広がりとともに、水に取り組む人々のきずなや祈りのルーツを探る内容となっています。今回広報で紹介した遺跡をはじめ、水との因縁浅からぬ本市にかかわる貴重な資料が、数多く展示されています。この機会にぜひご覧ください。

南アルプス市にかかわる主な展示資料

二本柳遺跡出土品(十日市場)、宮沢中村遺跡出土品(宮沢)、虚空蔵菩薩坐像(法善寺 加賀美)有野村治水絵図(有野)、釜無川氾濫絵図(長遠寺 鏡中条)、高砂渡し関係資料(上高砂)、九頭竜神祠(上高砂)、その他矢崎家文書など、徳島堰、御勅使川の治水にかかわる資料(有野)など

期 間 5月27日(月)まで  
休 館 日 毎週火曜日  
問 合 せ 山梨県立博物館  
住 所 〒406-0801  
          笛吹市御坂町成田1501-1  
電 話 055-261-2631



には、多くの場合、厚い砂礫層を挟んで平安時代や、さらには弥生時代の遺跡が眠っています。

どの時代も開発を可能にしたのは豊かな湧水でした。しかし、それが平坦な道でなかったことを、遺跡に堆積した砂礫の厚みが我々に教えてくれます。

我々はそこに、時代を超えて衰えない旺盛な開発への活力、常に自然と対話し、そこにアプローチし続けた先人のエネルギーを見つけることができるのです。

そのために、この地域では、いたる所で稲作が伝わった弥生時代、つづく古墳時代、奈良・平安時代、さらには中世、近世といった具合に、地下に連綿と重なり合う人々の暮らしの跡を見つけることができます。

ただ一方で、このような土地は水が人びとに豊かな恵みをもたらした反面、時に多すぎる水がその営みを押し流す、過酷な地でもありました。

この地域で行われた一連の発掘調査では、安定した湧水の利用を前提とした開発が、河川の氾らんや土石流によって流失し、埋没した後、時を経て(安定を待って)再び開発が試みられるという数百年～千年スパンのサイクルを見ることができます。例えば鎌倉時代の水田の下

月夜でも焼けるといわれた原七郷を伏流した御勅使川扇状地の水は、その扇端部である江原、十日市場、藤田、加賀美、鏡中条といったあたりで湧き出して、これより下流に豊かな水田景観を育んできました。

その歴史は今から二千年あまり前、山梨県に稲作の技術が伝わりと同時に、はやくも始まっています。先端技術であった稲作に適する土地として人々が真っ先に目をつけた場所のひとつが、このような伏流水を源とする安定した湧水で潤う地だったのです。